

## 第1章 「新入生調査」の結果

第1章では、新入生調査（本人）への回答者436名の分析結果について報告する。回答者の学部別の内訳は、文教育学部196名、理学部117名、生活科学部123名である。

### (1) 出身高校

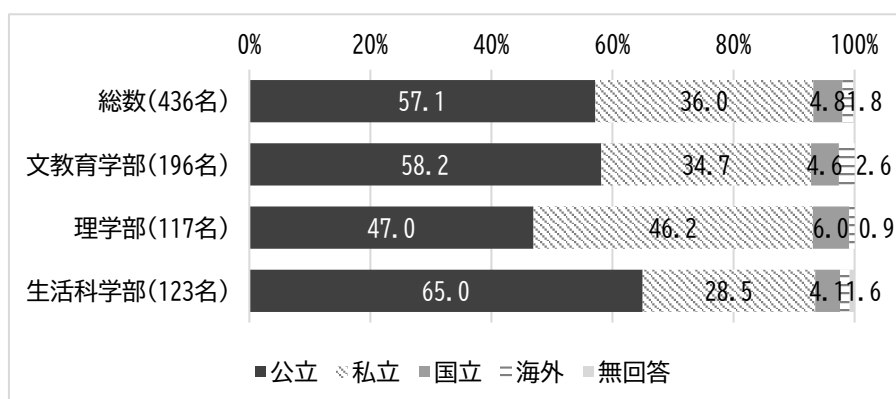
出身高校について①設置者、②種類、③学科、④出身高校の所在地を示す。

#### ① 設置者

図表1-1に出身高校の設置者について尋ねた結果を示す。出身高校の設置者について「国立」「公立」「私立」「海外」「高等学校卒業程度認定試験（高卒認定）」から選択してもらい回答を得た。

全体では、「公立」57.1%、「私立」36.0%、「国立」4.8%、「海外」1.8%であった（「高卒認定」と回答した者はいなかった）。学部別では、生活科学部は「公立」の割合が比較的高く（65.0%）、理学部はほかの2つの学部と比べると「私立」の割合が46.2%と高い。

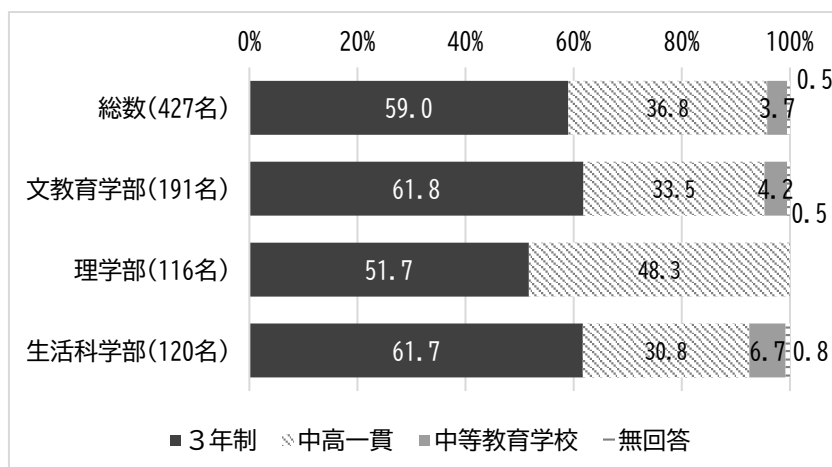
「公立」高校出身者の割合は令和2年度調査では63.3%、令和3年度調査では60.0%とこの数年は減少傾向である。令和3年度調査と比べるとさらに2.9ポイント減少しているものの、学部毎による設置者の特徴は過年度の結果と同様であった。



図表1-1 出身高校の設置者

#### ② 種類

図表1-2に出身高校の種類について尋ねた結果を示す。

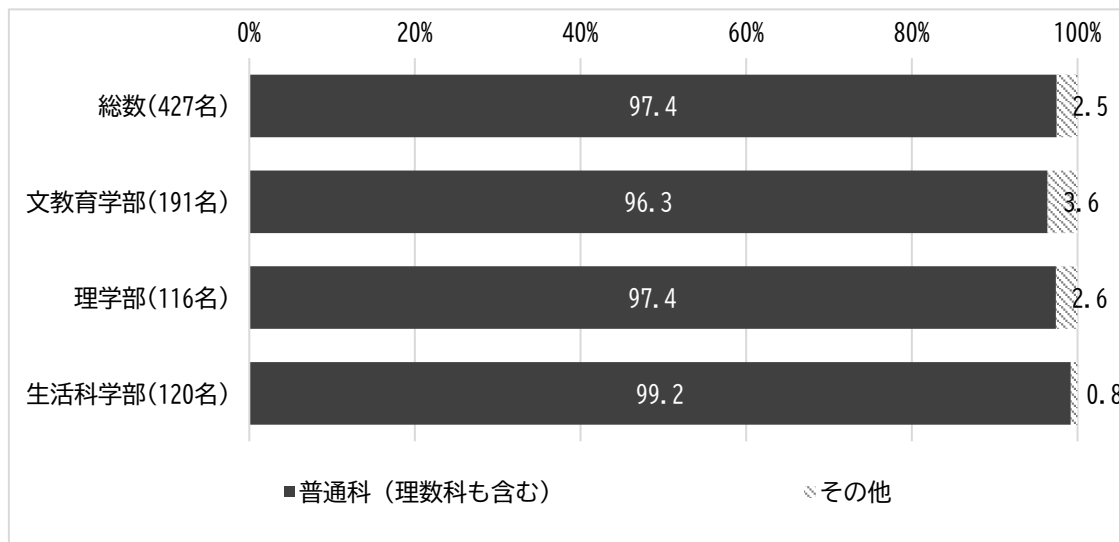


図表1-2 出身高校の種類

全体では、「3年制」が59.0%、「中高一貫」「中等教育学校」を合わせて40.5%と令和3年度<sup>2</sup>と大きな違いはない。学部で比較すると、理学部は、中高一貫出身者の割合が他の2学部に比べると多い。この特徴は、過年度と同様の傾向である。本年度の生活科学部入学者は公立校出身者が多いことから、「3年制」が過年度と比べて多くなっていると考えられる。

### ③ 学科

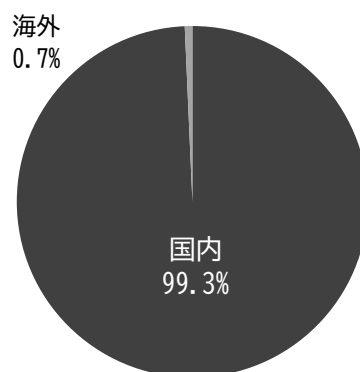
図表 1-3 に出身高校の学科について尋ねた結果を示す。全体の97.4%が「普通科」であり、学部間の差異はない。この傾向は、例年と同様の傾向であった。なお、「その他」には、総合学科（総数の0.9%）、専門学科（総数の1.1%）が含まれている。



図表 1-3 出身高校の学科

### ④ 出身高校の所在地

図表 1-4 に出身高校の所在地を「国内」「海外」別に示す。全体の99.3%が「国内」であった。



図表 1-4 出身高校の所在地

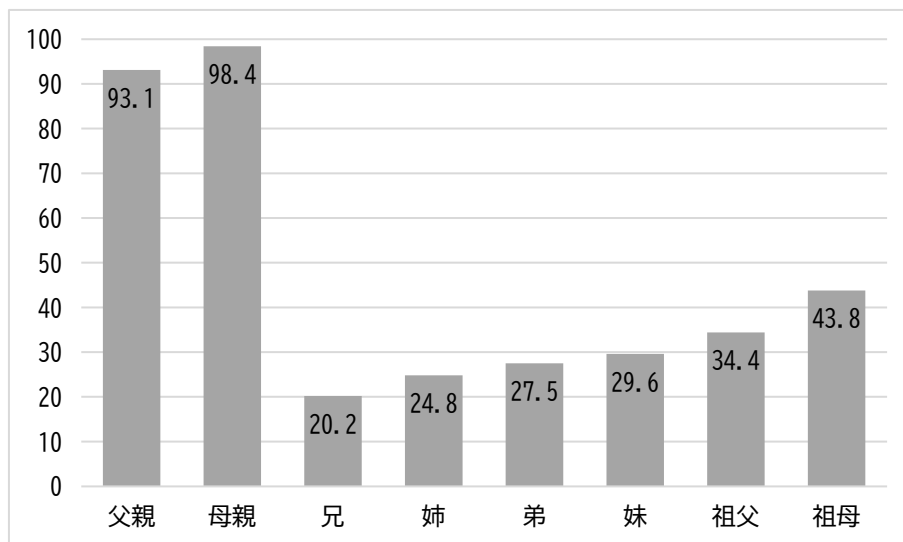
<sup>2</sup> 令和3年度調査は、「中等教育学校」は選択肢になく、本年度から追加した。令和3年度の3年制出身者の割合は、59.8%であった。

## (2) 家族構成

新入生の家族構成について、①家族構成、②きょうだい数について示す。

### ① 家族の構成

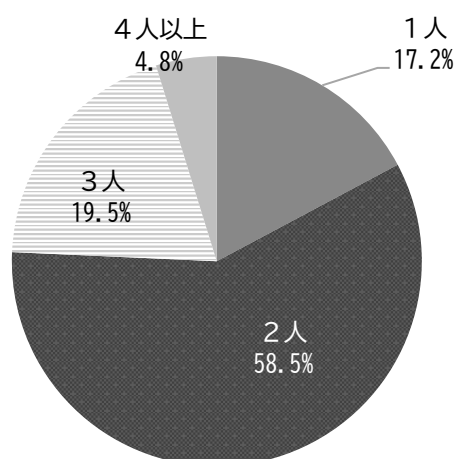
図表 2-1 に新入生の家族の構成について尋ねた結果を示す。家族構成について同居を問わず、複数選択可として回答を得た。家族の構成について、兄もしくは姉がいると回答した割合が 2 割程度、弟や妹がいると回答した割合が 3 割程度という回答傾向は、近年大きな変化は見られない。



図表 2-1 家族構成

### ② きょうだい数

図表 2-2 に自分を含めたきょうだい数について尋ねた結果を示す。2 人きょうだいの割合が最も高く(58.5%)、次いで「3 人」と回答した割合が 19.5%であった。令和 3 年度は 2 人きょうだいのが 59.0%、1 人が 21.9%といわゆるひとりっ子が比較的多かったが、近年の新入生の半分が 2 人きょうだいということについては変わらない。



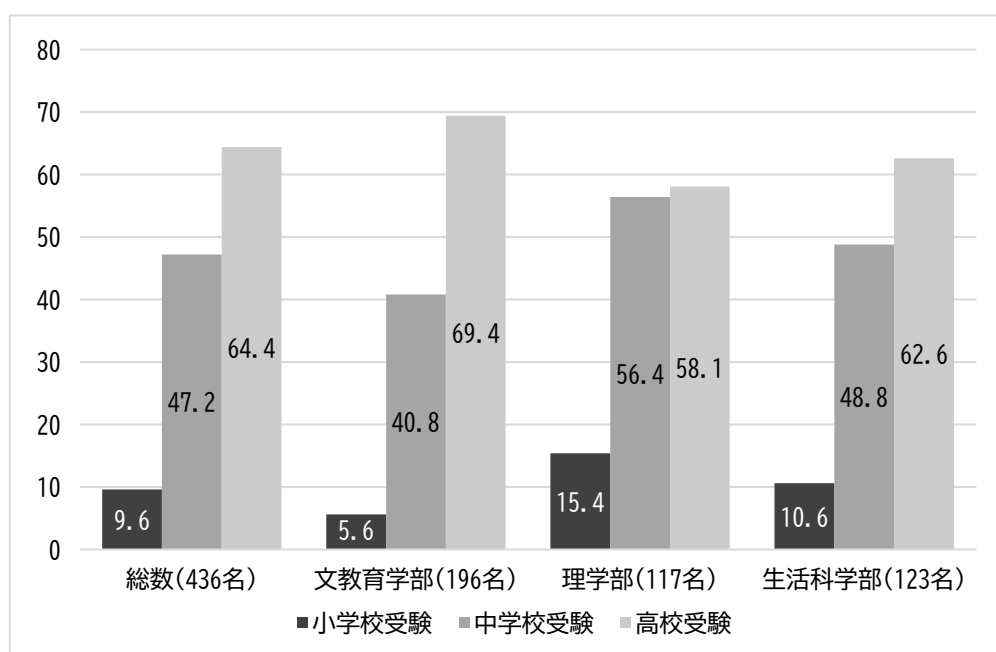
図表 2-2 自分を含めたきょうだい数

### (3) これまでの進路選択や学生生活

本節では、新入生のこれまでの進路選択や学生生活について、①これまでの受験経験、②本学の受験を決めた時期、③本学の志望の度合い、④高校卒業から現在までの間に経験したことについて示す。

#### ① これまでの受験経験

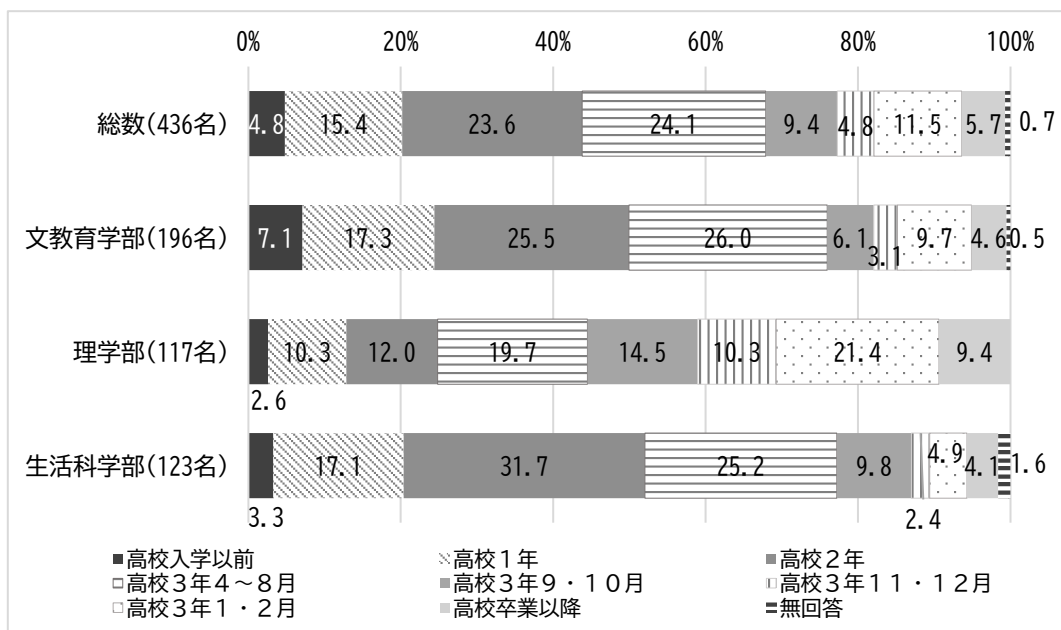
図表 3-1 に、これまでの受験経験について尋ねた結果を示す。全体の 9.6%が小学校受験を、47.2%が中学受験を、64.4%が高校受験を経験していた。小学校受験経験者が 1 割に満たず、中学校受験を半数程度が経験しているという傾向は平成 31 年度以降同様の傾向である。学部別では、他学部と比べると理学部は、小学校受験、中学受験を経験した割合が多い傾向がみられた。



図表 3-1 これまでの受験の経験

#### ② 本学の受験を決めた時期

図表 3-2 に本学の受験を決めた時期について尋ねた結果を示す。全体では「高校 2 年」23.6%、「高校 3 年 4~8 月」24.1%と比較的多い。このように高校 2 年生から高校 3 年生の 1 学期に本学の受験を決めるという傾向は例年と同様である。学部別では、理学部において「高校 3 年 1・2 月」「高校卒業以降」と回答する割合が 3 割程度と他学部と比べると高い。理学部生の本学受験決定時期が他学部と比べて遅い傾向も、例年と同様である。

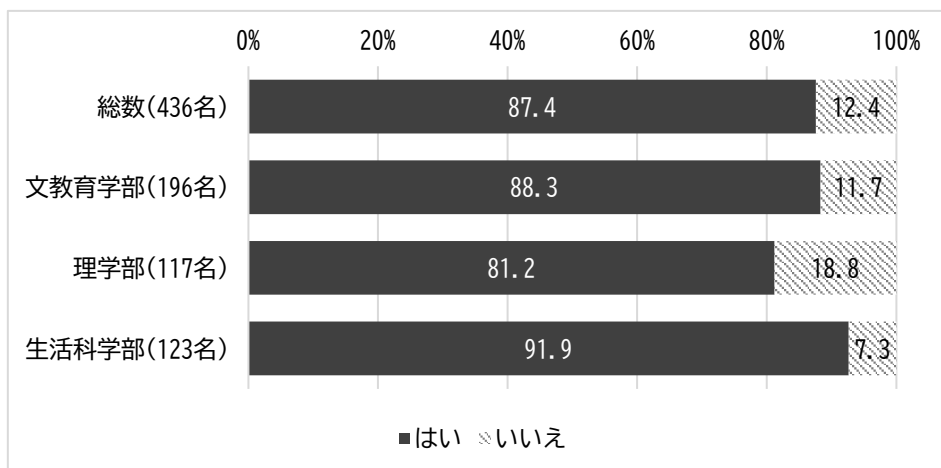


図表 3-2 本学の受験を決めた時期

### ③ 本学の志望の度合い

図表 3-3 に、受験時に本学が第一志望であったか否かについて尋ねた結果を示す。全体で見ると 87.4% の新生が「はい」と回答、すなわち本学を第一志望としており、令和 3 年度の 88.7% と同様に依然として高い。

学部別には、文教育学部、生活科学部は 9 割前後である一方で、理学部は 8 割程度と少し低めではあるが、近年同様の傾向である。数年間のトレンドを見ると、志望度において大きな変化は生じていないようである。



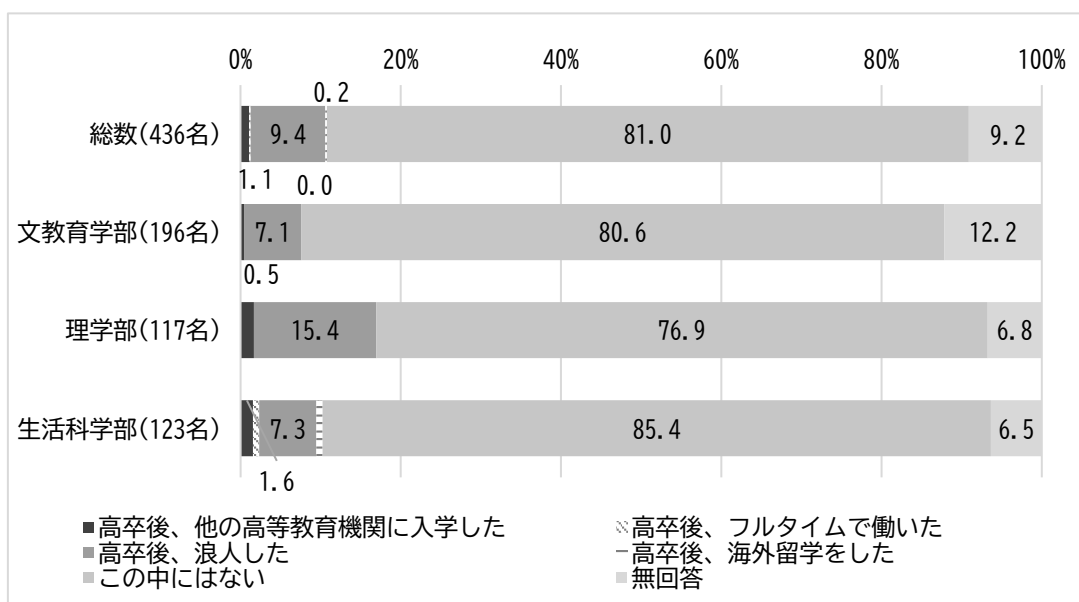
図表 3-3 本学の第一志望の度合い

#### ④ 高校卒業から現在までの間に経験したこと

図表 3-4 に、高校卒業から現在までに経験したことについて「大学生の学習・生活実態調査」（ベネッセ教育開発センター 2009）を参考に、複数回答可として尋ねた結果を示す。

過年度と同様「この中にはない」、つまり高校卒業後すぐに大学入学した者が全体の 81.0%と最も高かった。調査開始年度である 2011 年度の入学者に占める浪人生の割合の平均値は 13.8%であった。これを踏まえると、本年度は 9.4%と入学者に占める浪人生の割合は少なくなっており、減少傾向である。ただし、全体の 1 割程度が無回答であることには留意が必要である。

各学部における浪人の割合は、文教育学部が相対的に低いことは変わらないが、従来、理学部および生活科学部の浪人の割合が高いことが指摘されてきたが、令和 4 年度は、文教育学部および生活科学部の浪人割合は 1 割に満たない。



図表 3-4 高校卒業から現在までの間に経験したこと

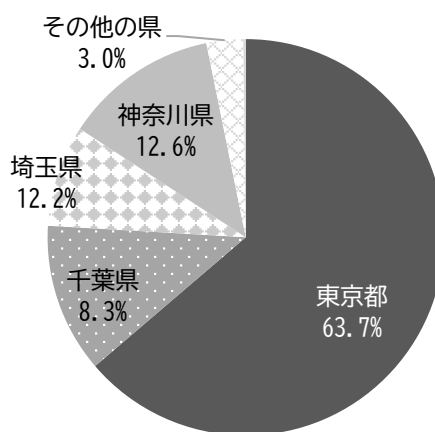
#### (4) 大学入学後の生活の予定

本節では、新入生の大学入学後の生活の予定について尋ねた結果を示す。

調査項目は、①大学入学後に居住予定の都道府県、②大学入学後の住居の予定、③1か月の家賃の予算、④1か月あたりの仕送り予定金額、⑤大学に入学後、特にこの1年で頑張ろうと思う活動、⑥アルバイト活動の予定、⑦授業料の負担予定、⑧大学生生活での不安・心配事、⑨本学の学生支援活動への期待についてである。

##### ① 大学入学後に居住予定の都道府県

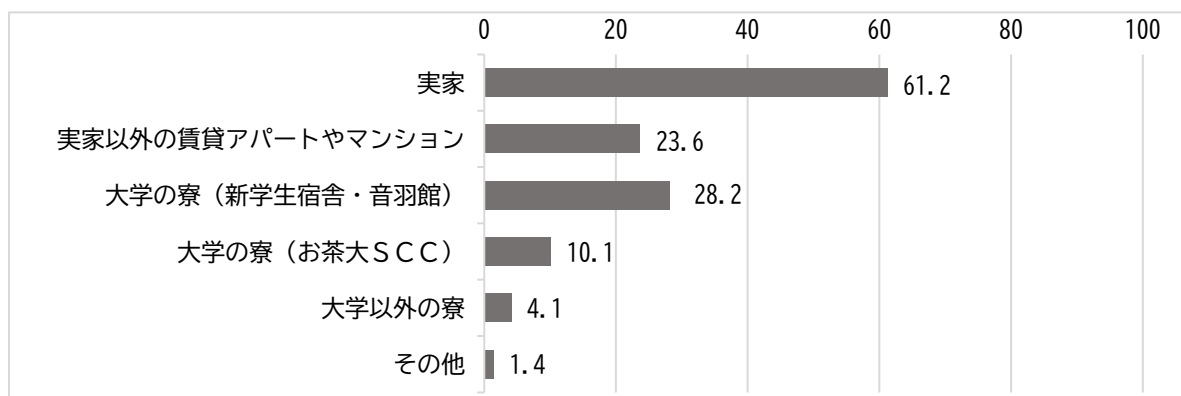
図表 4-1 に大学入学後に居住予定の都道府県について尋ねた結果を示す。全体では、東京都に居住予定の者が 63.7%と最も多く、神奈川県、埼玉県、千葉県と続く。この傾向は例年と同様である。



図表 4-1 大学入学後に居住予定の都道府県

##### ② 大学入学後の住居の予定

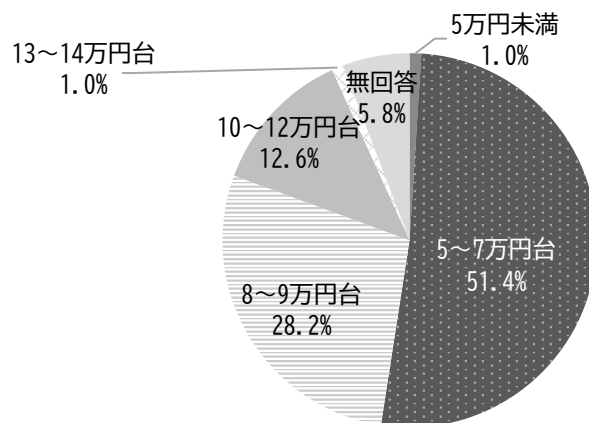
図表 4-2 に、大学入学後に予定している住居について、複数回答可として尋ねた結果を示す。全体では「実家」が 61.2%を占め、「賃貸アパートやマンション」23.6%、「新学生宿舎・音羽館」28.2%、「お茶大 SCC」10.1%といった学生寮が続く。「実家」から通学する予定の学生が多いという傾向は過年度と同様である。2022 年 4 月大学敷地内に開設された音羽館に 3 割近くの新入生が居住予定である。令和 3 年度調査では国際学生宿舎(2022 年 3 月をもって閉館)の居住割合が 14.1%であったことを踏まえると、大学寮への入寮者が多いことがわかる。図表には示していないが、近年理学部新入生は、実家から通学を想定する割合が 7 割を超えていたが、本年度は他学部と同程度の 6 割程度であった。



図表 4-2 大学入学後に予定している住居

### ③ 1か月の家賃（管理費込み）の予算

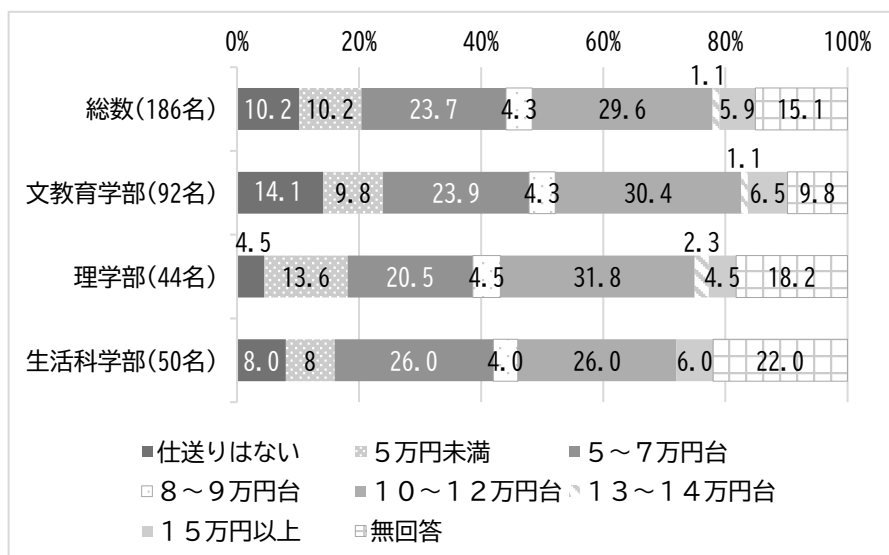
図表 4-3 に、1か月の家賃（管理費込み）の予算（千円未満は四捨五入）について、「賃貸アパートやマンション」に居住予定の者に尋ねた結果を示す<sup>3</sup>。例年と同様に「5～7万円」が51.4%と最も多く、「8～9万円」28.2%と続き、両カテゴリーを合わせるとほぼ8割であった。令和3年度は、「5～7万円」が47.5%、「8～9万円」が29.7%であった。令和3年度4月に新設された学生寮（音羽館）の1か月あたり家賃は約6万円<sup>4</sup>であることを合わせて考えると、音羽館に居住することで1か月あたりの家賃支出は抑制できる可能性がある。



図表 4-3 1か月の家賃（管理費込み）の予算

### ④ 1か月あたりの仕送り予定金額

図表 4-4 に、1か月あたりの仕送り予定額（万円未満は四捨五入）について、「実家」以外に居住予定の者に尋ねた結果を示す<sup>5</sup>。「10～12万円台」が29.6%と最も多く、次に「5～7万円台」が23.7%となっている。令和3年調査では「5～7万円台」が最も多く、次いで「10～12万円台」であったことから例年に比べると仕送り額が例年よりも多い者の割合が増えている。



図表 4-4 1か月あたりの仕送り予定額

3 本分析の対象者数は101名である。

4 賃料、共益費、インターネット使用料、上下水道料、電気使用料、保険料の諸経費を含んだ金額である

5 本分析の対象者数は150名である。



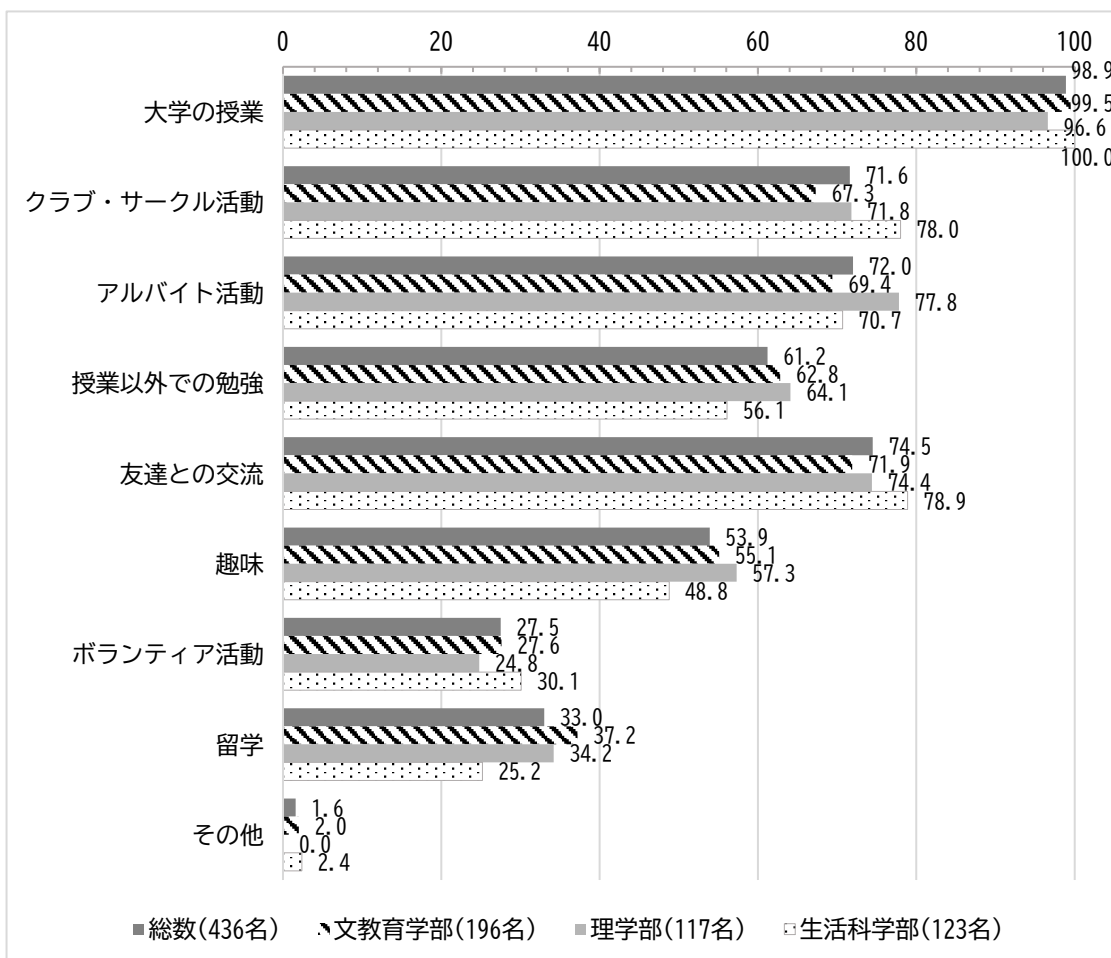
学部による分布を見ると、「仕送りがない」割合がもっとも多いのが文教育学部 14.1%であり、10万円未満の者が半分を超えている。しかし、仕送り額に関する質問は未回答者が多いことから、この回答を実態ととらえてよいかどうかには検討が必要である。

なお、「第56回 学生生活実態調査の概要報告」(全国大学生生活協同組合連合会 2022)によれば、下宿生のうち、仕送り金額が5~10万円の学生の割合は34.3%、仕送り10万円以上は27.9%、仕送り0の割合は7.5%、5万円未満は16.0%である。この調査との比較において、仕送り金額が10万円程度までの本学学生の割合は全国の大学生の平均的な水準とほぼ同等であると考えられる。

### ⑤ 大学に入学後、特にこの1年で頑張ろうと思う活動

図表4-5に、入学後、特にこの1年で頑張ろうと思う活動について、複数回答可として尋ねた結果を示す。「大学の授業」が98.9%とどの学部でも例年通り最も高い。続いて、「友達との交流」74.5%、「アルバイト活動」72.0%、「クラブ・サークル活動」71.6%である。

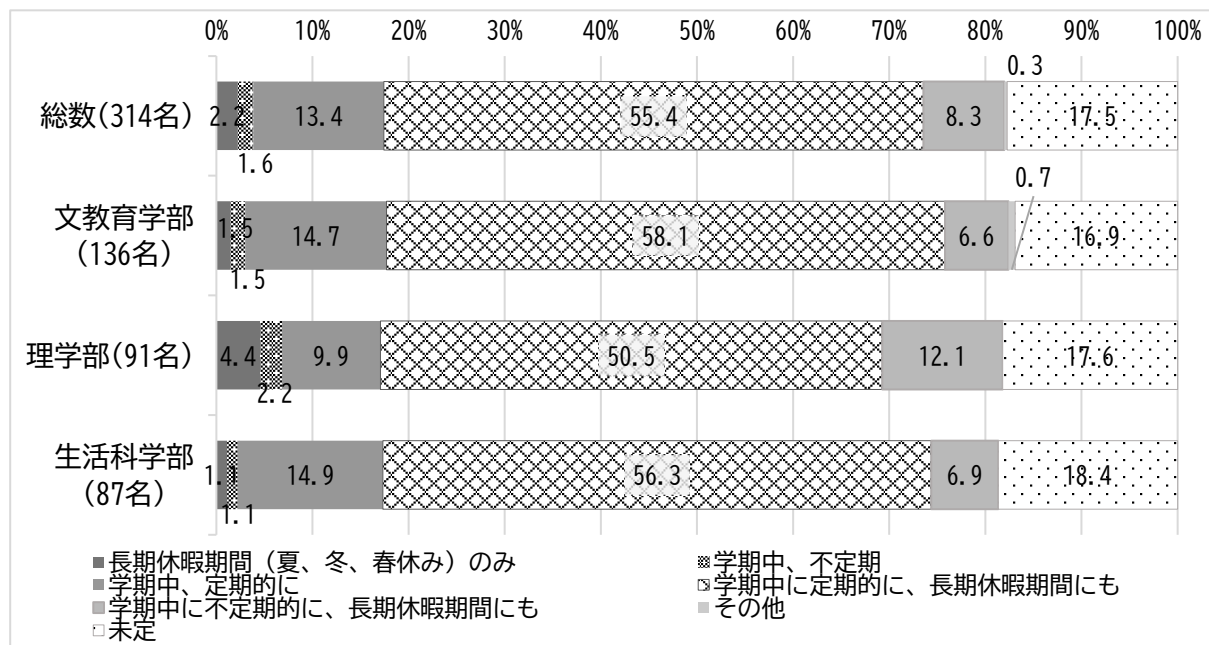
平成29年度の調査から加えた「留学」は、平成29年度25.2%、平成30年度35.4%、平成31年度36.3%、令和2年度38.4%と上昇傾向にあった。しかし、令和3年度調査では、31.8%と前回から6.6ポイント減少し、本年度も33.0%と昨年度と比べて微増に留まっている。一方、「友達との交流」や「趣味」の回答割合の増加傾向がみられる。「趣味」は令和2年度調査で44.4%、令和3年度調査で50.8%、本年度は53.9%である。「友達との交流」は令和3年度72.1%で本年度74.5%と2.4ポイントではあるが増えている。本調査からのみでは判断が難しいものの、ここで指摘した留学、趣味、友達との交流などの増減の傾向は新型コロナウイルスの感染拡大に伴う影響の可能性が考えられる。学生の活動ニーズをとらえ、適切にサポートすることが求められよう。



図表 4-5 大学に入学後、特にこの1年で頑張ろうと思う活動

### ⑥ アルバイト活動の予定

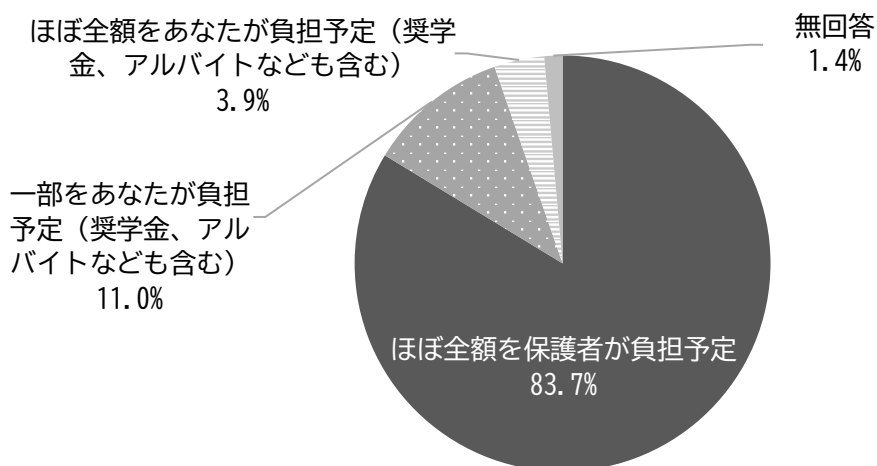
図表 4-6 に、入学後にアルバイト活動を予定している者に対して、具体的な活動時期や仕方を尋ねた結果を示す。最も多いのは「学期中に定期的に、長期休暇期間にも」との回答で 55.4% であり、「学期中に定期的に」13.4% と合わせると 68.8% である。つまり、授業がある期間中に定期的にアルバイトをする予定と回答した割合は 7 割近くである。



図表 4-6 アルバイト活動をする予定の時期や頻度

### ⑦ 授業料の負担予定

図表 4-7 に、授業料の負担予定について尋ねた結果を示す。「ほぼ全額を保護者が負担予定」が 83.7% である。この「ほぼ全額を保護者が負担予定」を回答する割合は、前年度と比較すると 0.4 ポイントの増加に過ぎないが調査開始時(平成 23 年度調査では 74.0%)と比較すると増加している。ただし、「ほぼ全額をあなたが負担予定」との回答は調査開始以降はつきがあるものの、令和 2 年度 1.5%、令和 3 年度は 3.1%、本年度 3.9% と近年は漸増している。回答人数にすると昨年度 10 名、本年度 17 名が授業料の「ほぼ全額を負担」していると回答している。



図表 4-7 授業料の負担予定

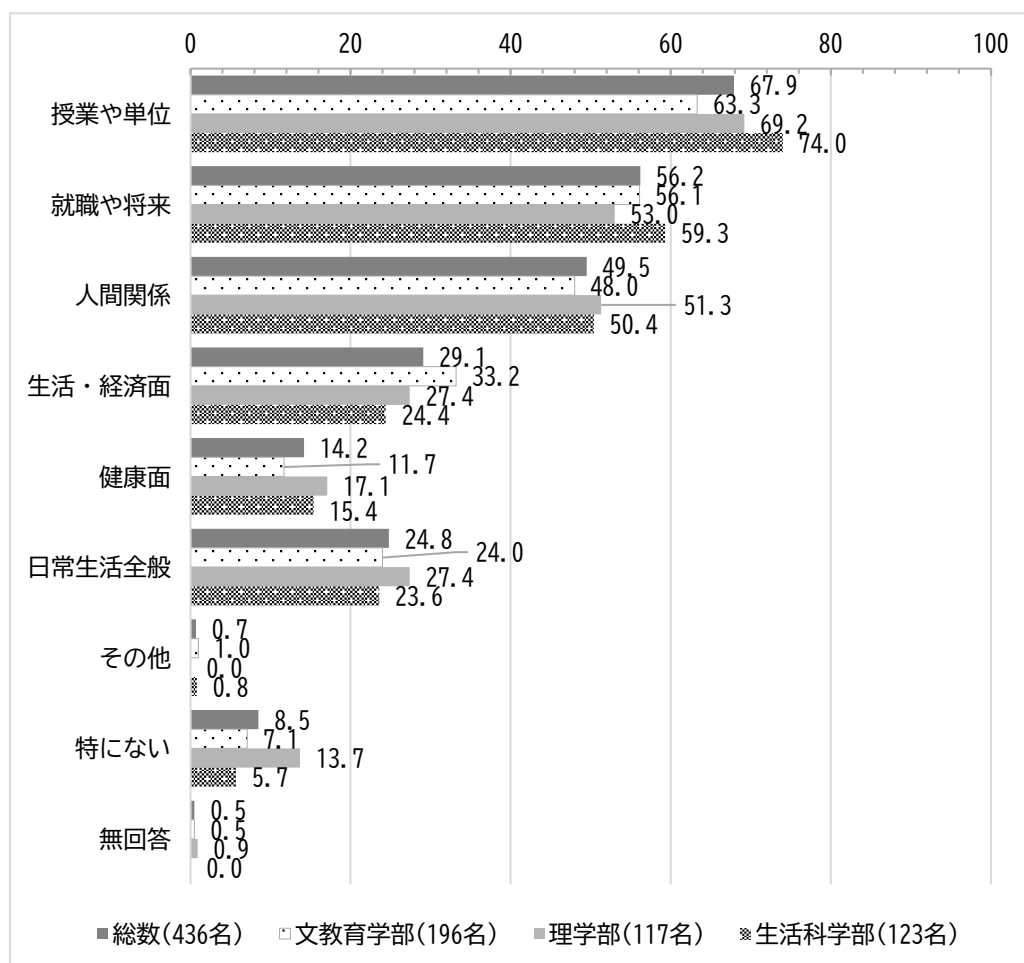
### ⑧ 大学生活での不安・心配事

図表 4-8 に、全国大学生生活協同組合連合会が実施している「保護者に聞く新入生調査」の調査項目を参考に、大学生活が始まって心配なことについて複数回答可として尋ねた結果を示す。

最も高い割合を示したのは「授業や単位」67.9%で、「就職や将来」56.2%、「人間関係」49.5%が続く。この上位3項目の内容は平成30年度以降と同様である。「就職や将来」に不安・心配に感じる割合は令和2年度と令和3年度では2.7ポイント、さらに本年度は3.4ポイント増加している。顕著な差とは言えないが、コロナ禍において将来に対する不安が高まっている可能性もある。

学部別では、理学部において「就職や将来」が低く「授業や単位」が高くなる傾向があったが、本年度はそのような傾向は見られない。一方、生活科学部は昨年度「生活・経済面」をあげる割合が比較的高かった(37.4%)が、本年度は3学部の中で割合は最も低かった。

図表 4-8 には示していないものの、学科別にみると学部の中でもばらつきがみられることがわかった。具体的には、情報科学科は「授業や単位」について心配をしている割合が多い(80.0%)一方で、「就職や将来」について心配する割合は低め(42.9%)である。心配事として「就職や将来」をあげる割合は、文教育学部人間社会学科(46.3%)、理学部数学科(29.4%)、理学部情報科学科(42.9%)、生活科学部食物栄養学科(48.7%)で半数を下回っており、同じ学部内でもばらつきが大きいことがわかる。



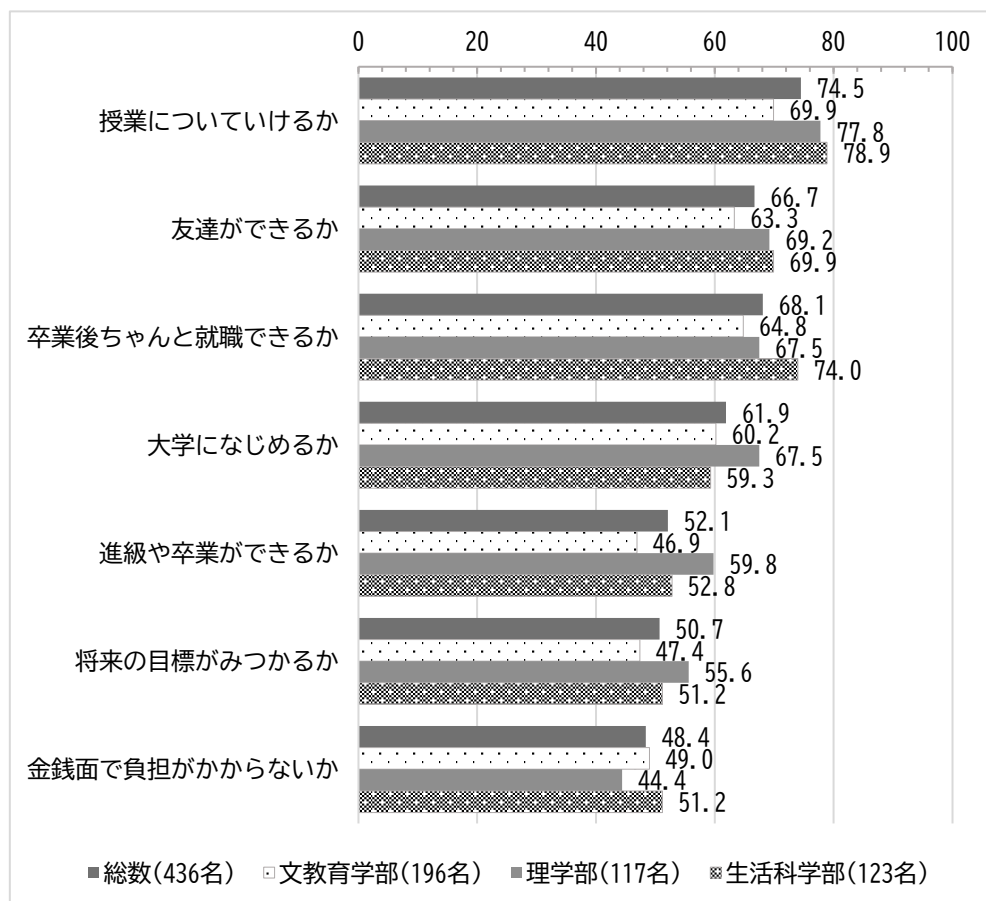
図表 4-8 大学生活が始まって心配なこと

さらに図表 4-9 は大学入学後の不安・心配事に対する今の気持ちについて尋ねた結果を示す。

今の気持ちは「あてはまる」「ある程度あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で尋ねているが、本分析は「あてはまる」と「ある程度あてはまる」と回答した者の割合を合算した割合（以下、「不安に感じている割合」と表記）を項目別・学部別に示す。

まず、令和3年度調査の全体の特徴を確認する。「不安に感じている割合」がもっとも多いのが「授業についていけるか」で74.5%、次いで「卒業後ちゃんと就職ができるか」の68.1%、「友達ができるか」の66.7%であった。「金銭面での負担」を除くすべての項目で「不安に感じている割合」は5割を超えていた。

次に令和3年度調査との比較したところ、顕著に差がみられる項目はなかった。



図表 4-9 大学生活での不安・心配事

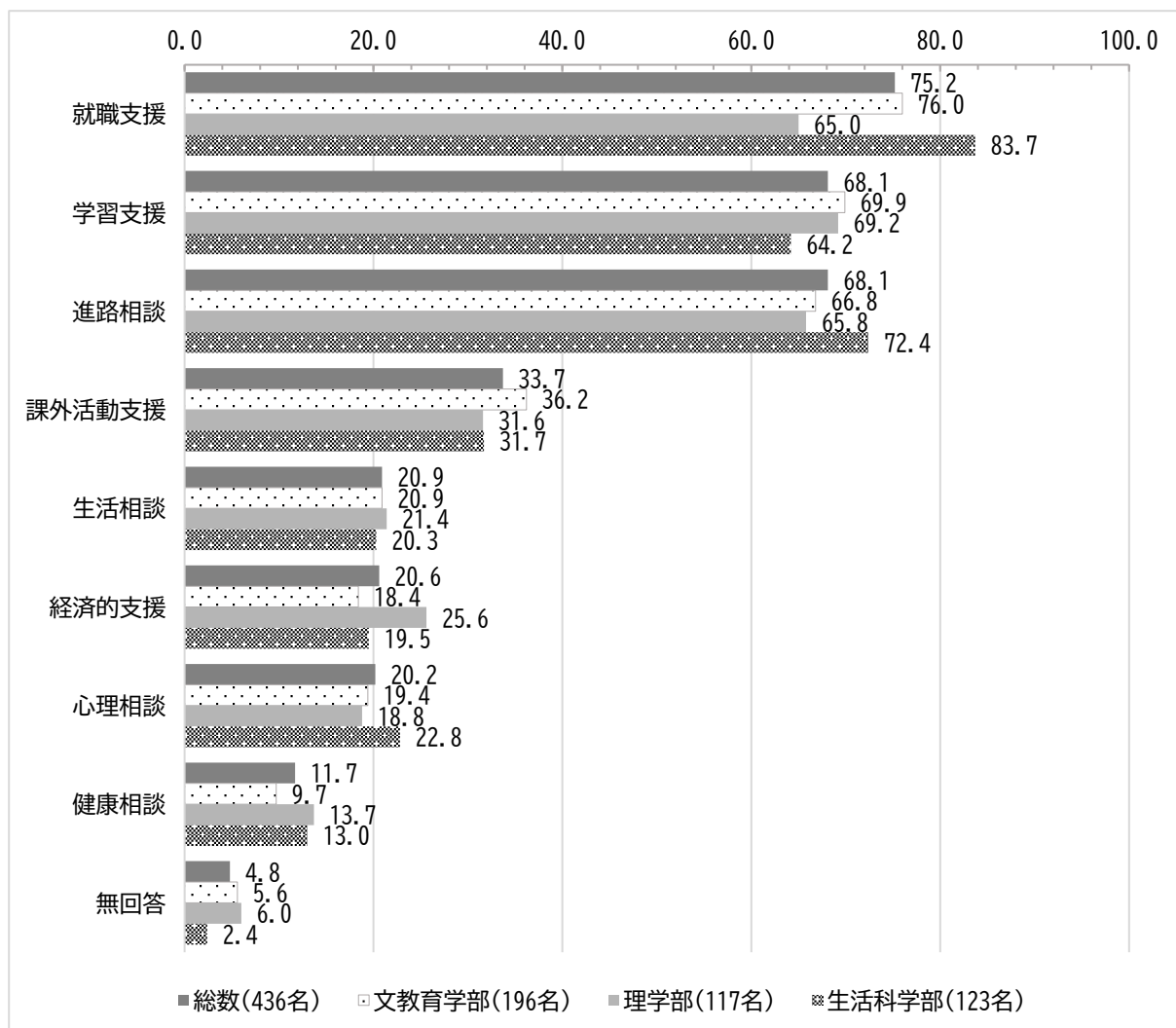
最後に令和4年度調査の結果を学部別に比較する。「授業についていけるか」不安に感じている割合について、文教育学部では69.9%に対し、理学部は77.8%、生活科学部は78.9%と差がみられる。理学部では「大学になじめるか」「進級や卒業ができるか」「将来の目標が見つかるか」についても文教育学部に比べると不安を感じる割合が高めである。

何に不安を感じているかについては、学科によっても異なる傾向がみられる。図表には示していないが、学科ごとの特徴を簡単に述べる。「卒業後就職できるか」は文教育学部の中でも人文科学科の新生において不安に感じている割合が多く（79.6%）、人間社会科学科（51.2%）、芸術・表現行動学科（45.8%）は比較的低い。「将来の目標が見つかるか」については、理学部化学科（70.0%）、生活科学部人間生活学科（70.2%）の新生は不安に感じている割合が多い。

### ⑨ 本学の学生支援活動への期待

図表 4-10 は、本学の学生支援活動に期待することについて、複数回答可として尋ねた結果である。まず、令和 4 年度調査全体の傾向について確認する。全体では「就職支援」が例年と同様に 75.2%と最も高く、次いで「進路相談」68.1%、「学習支援」68.1%となっている。この 3 つの支援に対する回答が多いことは例年の傾向と同様である。

令和 4 年度調査の結果を学部別に比較する。生活科学部は「生活相談」「心理相談」「健康相談」と【相談】に期待する割合が多くなっている。、理学部が「進路相談」「学習支援」の割合が高いこと、文教育学部と生活科学部は「就職支援」が高いことは例年と同じ傾向であった。なお、令和 3 年度調査と比較した際に顕著な差が認められる項目はなかった。



図表 4-10 本学の学生支援活動への期待

## (5) 将来の進路

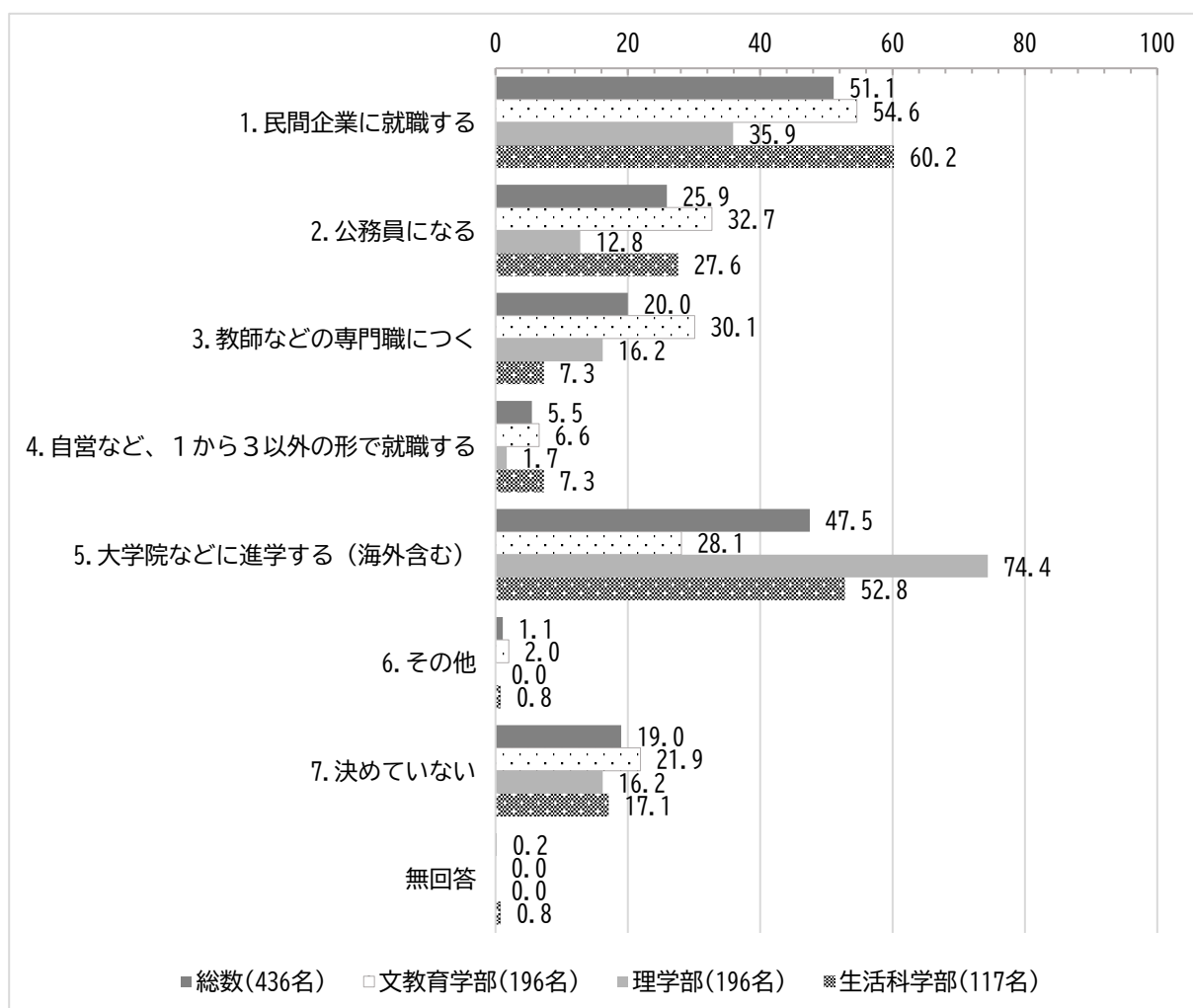
本節では、新入生の将来の進路について①大学卒業後の進路希望、②大学卒業後のキャリアについての考え、③就職や将来に関する親の関与について示す。

### ① 大学卒業後の進路希望

図表 5-1 に、大学卒業後の進路希望について複数回答可として尋ねた結果を示す。

全体で見ると、「民間企業」への就職希望者が最も多く 51.1%、「大学院など（海外含む）」がそれに続いて 47.5%であった。令和 3 年度調査と比較してもこの傾向に顕著な差はなかった。ただし、令和 4 年度の「民間企業」への就職希望者の 51.1%という割合は、令和 3 年度（56.4%）令和 2 年度（55.9%）など近年調査と比べると漸減している。

令和 4 年度調査結果を学部別に比較する。文教育学部では、「民間企業」への就職希望が 54.6%と半数を超えているものの、「公務員」および「教師などの専門職」を希望する者がそれぞれ 32.7%、30.1%と 3 割を超えていることが特徴である。理学部は「大学院などに進学」を希望する割合が令和 3 年度調査でも 71.0%と 7 割を超えていたが、令和 4 年度は 74.4%とより多くの者が入学時点から大学院への進学を希望していることがわかる。生活科学部では「民間企業」就職希望者が 60.2%と最も多く、「大学院進学」希望者が 52.8%、「公務員」希望者が 27.6%である。これは学部内に文系と理系が存在し、特に心理学科と人間・環境科学科の大学院進学希望が増えていることに起因していると考えられる。



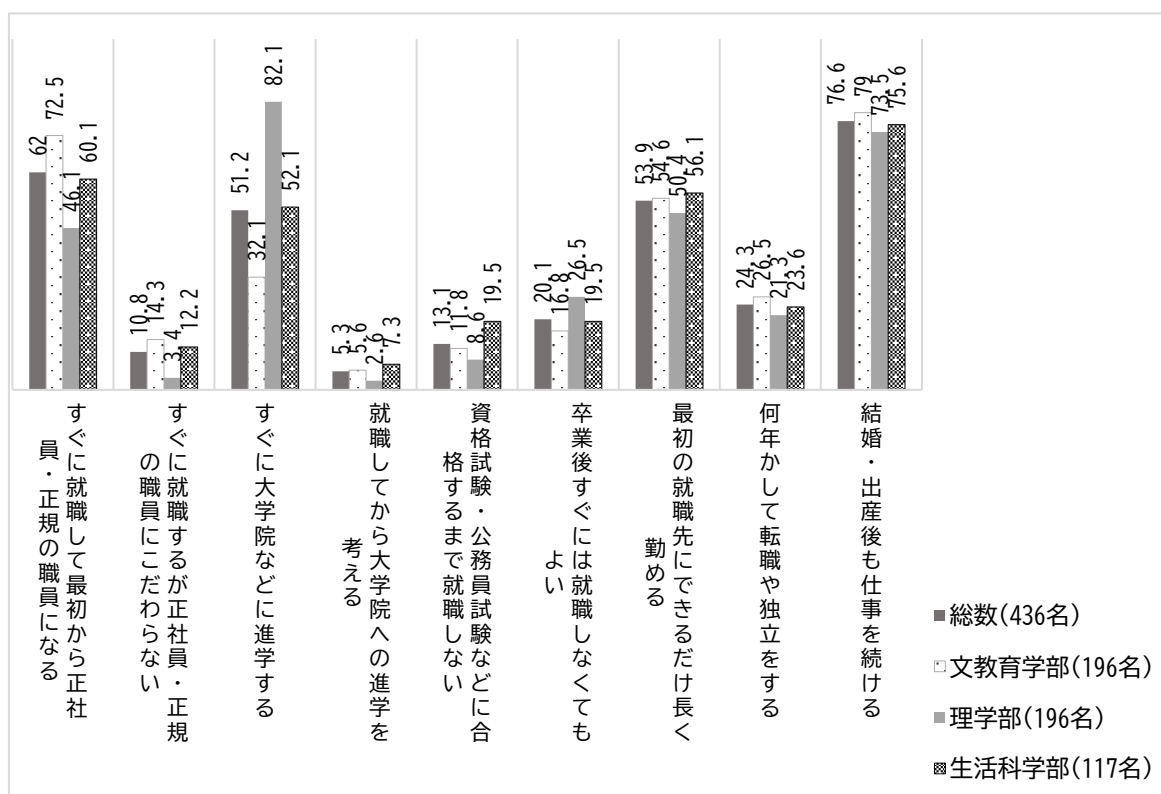
図表 5-1 大学卒業後の進路希望

## ② 大学卒業後のキャリアについての考え

図表 5-2 に「大学卒業後のキャリアについての考え」に関する 9 項目について尋ねた結果を示す<sup>6</sup>。図表に示す割合は、「そう思う」「ある程度思う」を合計したものである。

「すぐに就職して正社員・正規の職員になる」は全体で 62.0%である。「最初の就職先にできる限り長く勤める」が 53.9%と半数を占めており、「何年かして転職や独立をする」に対して「そう思わない」と回答した割合が 3 割程度であることから、卒業後に正規就業をして、長期勤続するという進路を希望する学生は比較的多いと考えられる。一方で「すぐに就職して正社員・正規の職員になる」に対して「今はまだわからない」と回答した割合は全体で 19.5%、理学部や生活科学部では 2 割を超えており、就職か進学かなど大学入学時点では決め切れていない状況であることがわかった。

「結婚・出産後も仕事を続ける」については、「そう思わない」と回答した割合は全体の 1.6%であり、「今はまだわからない」と回答した割合は 21.6%であり、結婚出産を経ても働きたいと明確に考えている学生が多い。



図表 5-2 大学卒業後のキャリアについての考え (全体)

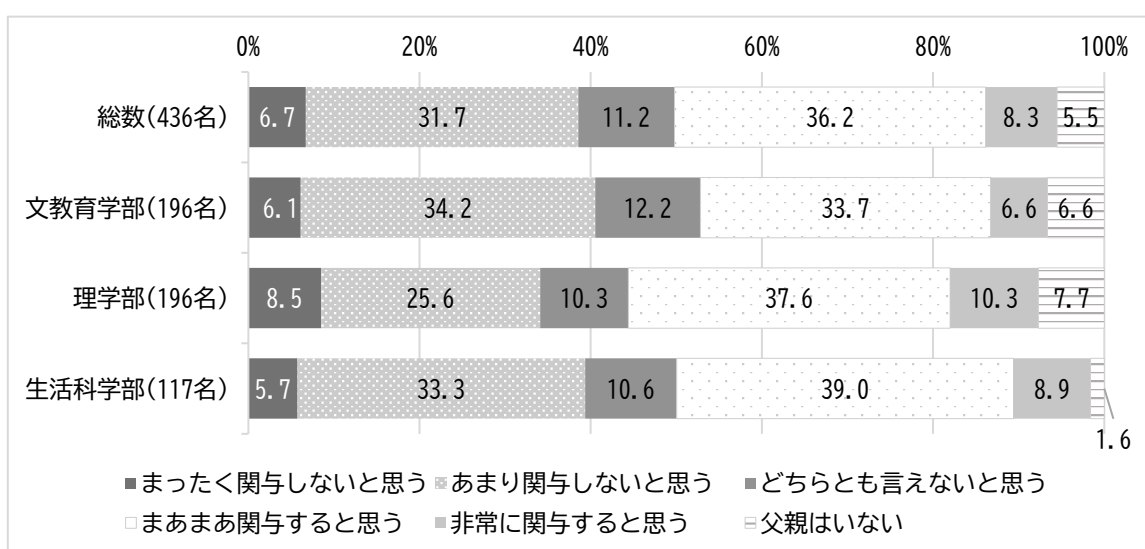
<sup>6</sup> 令和 4 年度調査では、「そう思う」「ある程度思う」「そう思わない」だけでなく「今はわからない」を選択肢に加えた。回答傾向の変化は選択肢の追加に起因するものと考えられる。



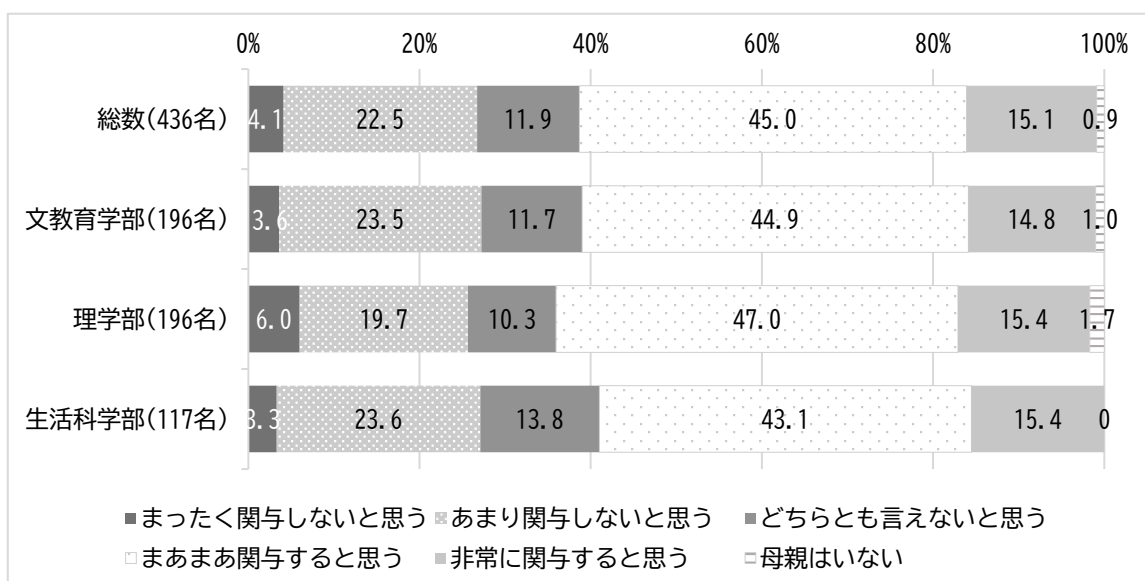
### ③ 就職や将来に関する親の関与

就職や将来に関する親の関与について「あなたのご両親は、あなたの就職や将来のことに、どれくらい関与しますか」について、「まったく関与しないと思う」「あまり関与しないと思う」「どちらとも言えない」「まあまあ関与すると思う」「非常に関与すると思う」の5件法で尋ねた。図表5-3に父親の関与について尋ねた結果を、図表5-4に母親の関与について尋ねた結果を示す。

はじめに父親の関与について、令和4年度の新入生は、就職や将来のことに、全体の44.5%が将来に対して父親の「関与がある」（「非常に関与すると思う」＋「まあまあ関与すると思う」の合算）と考えている。同様に母親に関しては、全体の60.1%が「関与がある」と考えていることがわかった。このように、就職や将来のことに、親の関与があると感じている新生者が半数程度存在すること、父親より母親からの関与があるという傾向は例年と同様である。学部別では、理学部が父親・母親ともに「関与がある」の割合が他学部より多いように見えるが、統計的な差は認められなかった。



図表 5-3 就職や将来のことに、関する父親の関与



図表 5-4 就職や将来のことに、関する母親の関与